



Title	儀礼的空間における沖縄アイデンティティ継承のこころみ : 大正沖縄県人会の「敬老会」を事例に
Author(s)	猪岡, 叶英
Citation	日本学報. 2016, 35, p. 177-188
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55506
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

儀礼的空間における 沖縄アイデンティティ継承のこころみ ——大正沖縄県人会の「敬老会」を事例に——

猪 岡 叶 英

はじめに

近年、県人会などの同郷組織による民俗儀礼の実践は、新たな儀礼の解釈と価値づけを行っているものが多いことが指摘され、多様な来歴（ルーツ）を持つ人びとに注目する視点の重要性が指摘されるようになってきている¹⁾。特に、本土や海外に出稼ぎや移住した沖縄出身者による、「沖縄」の芸能や習慣の実践については、比較的高い関心が向けられてきた²⁾。沖縄出身者による「沖縄」の芸能や習慣の実践は、信仰とは異なる文脈でアイデンティティの表明や継承のため行われることが明らかにされてきたといえるが、移住の第一・二世代の高齢化にともなって、沖縄アイデンティティがどのように子や孫に受け継がれていくのかに関しては、多くの課題が残されているといえる。

本稿では、沖縄出身の一世二世とその子や孫世代が多い、大阪市大正区に拠点を置く大正沖縄県人会による、「敬老会」の場に着目する。

大正沖縄県人会の「敬老会」は、名称および日程が「敬老の日」（9月第三月曜日）前後の土日に行われることから、一見して本土地域の敬老会と同一視されやすいが、県会に所属する沖縄出身の高齢者のみを対象としている。会の構成は、沖縄の市町村字などが主催する「合同の生年祝い」³⁾と共通しており、沖縄の踊りや民謡が県会に属する若手メンバーを中心として披露され、敬老会に参加した敬老者⁴⁾に「沖縄に帰った時に出た合同（の生年）祝いの会場におるみたいや」⁵⁾と言わしめるほどの活気につつまれている。

ここでは、平成26（2014）年に行われた大正沖縄県人会の「敬老会」を中心に考察を行い、「敬老会」の儀礼的空間において子や孫にあたる現行の沖縄出身者コミュニティが敬老者にむける眼差しと当事者の反応を通じて、第一・二世代の高齢化にともなって沖縄の文化やアイデンティティが子や孫にいかに受け継がれていくのかを考える端緒とする。

1. 大正沖縄県人会と「敬老会」

現在、大阪市内には「北（旧大淀）沖縄県人会」「此花沖縄県人会」「住之江沖縄県人会」

「大正沖縄県人会」「西成沖縄県人会」「西淀川沖縄県人会」「港沖縄県人会」「都島沖縄県人会」「中央西沖縄県人会」の九つの県人会、堺市には「堺沖縄県人クラブ」があり、大阪府内では10を数える県人会がある。これら各県人会を統括するのは、「大阪沖縄県人会連合会」である⁶⁾。

大正沖縄県人会における合同の長寿祝いである、敬老会の位置づけを考えるため、県人会の活動記録等とともに、聞き取りを実施した⁷⁾。

大正沖縄県人会は、昭和10（1935）年5月に結成され、大正区内の沖縄出身者の相互扶助団体としての性格を持つ。平成27（2015）年に80周年を迎える。

終戦直後から昭和30（1955）年ごろまでは、在阪沖縄出身者および外地からの引揚者に対する救援護活動が中心であり、昭和40（1965）年ごろからは、沖縄の早期本土復帰に向けた活動に重点が置かれていた。本土復帰を機に会員の親睦と福祉といった文化事業が主な活動となっている〔大阪沖縄県人会連合会 1997〕。

現在、平尾・小林・北恩加島の三分会に分れており、各分会には青年部、婦人部と数年前まで敬老若水会があった。大正沖縄県人会の行事として新年互礼会、敬老会、大阪沖縄県人会連合会のソフトボールおよび体育大会への参加、忘年会（青年部による越年交流会）や役員改選の総会などがある〔大阪沖縄県人連合会 1997：142-143〕。平成25（2013）年から、大正沖縄県人会の主催の「River大正エイサー祭」が平尾公園グラウンドで開催され、以降も平成26、27年と引き続き行われている。

平成26年に、大正沖縄県人会の会長に就任した仲村隆男（昭和27年生）によれば、大正沖縄県人会の敬老会は、県人会の下部組織であった敬老若水会の主催行事として50年ほど前から4～5年前まで70代前後の区内の県人会に属する高齢者を祝っていた。しかし、結成当時のメンバーの減少にとともに、県人会主催で行うようになったという。

また、住之江区沖縄県人会の元会長で、現在大阪沖縄会館の管理人等を務める大城富雄（昭和16年生）によれば、昭和30年、40年ごろの大正区では、「村人会」があり、生年祝いの際にはお金やタオル（手拭）が配られたといい、61歳の祝いも盛んであったという。

『雄飛——大阪の沖縄 大阪沖縄県人会連合会五十周年記念誌』〔1997〕の「第一節 各地区県人会の歩み 四、大阪大正沖縄県人会」の項には、「昭和58年新年交流会並生年合同祝賀会／昭和58年1月（85歳以上の方にお祝い）」とのキャプションがつけられた写真（写真1）が掲載されている。このことから、昭和50年代の県人会主催の敬老会は沖縄の生年祝いの名称を援用し、時期も沖縄の生年祝いに合わせた1月に行われていたと推測される。

現在の大正沖縄県人会では、数え85歳、88歳（トーカチ）や97歳（カジマヤー）⁸⁾といった当たり年の人に、金一封（お祝い金）を渡しているものの、時期は「敬老の日」に近い



写真1 昭和58年の大正沖縄県人会の新年交流会並生年合同祝賀会

／昭和58年1月〔大阪沖縄県人会連合会 1997：144〕

9月の土日となり、名称も「敬老会」となっている。また、仲村隆男によれば、7～8年前まで、数え75歳以上の県人を無料で招待していたが、高齢化にともない80歳以上に引き上げたという。

2. 大正沖縄県人会の「敬老会」の儀礼的空間

平成26年9月21日の大正沖縄県人会の「敬老会」における、大正沖縄県人会の会長、世界女子ボクシングのミニフライ級チャンピオンの池原久美子、敬老代表の久高将松、第二部司会者の中村和文の発言を引用し、それぞれの「挨拶」「祝辞」「謝辞」に見られる特徴の分析を行う。4名の内、大正沖縄県人会の会長は父母の代、中村和文は祖父母の代、池原久美子は曾祖父の代にそれぞれ沖縄から大正区への移住を経験している。

また、この際、敬老者を中心とする会場（聴衆）の反応（リアクション）にも着目する。挨拶や祝辞（スピーチ）でどのような言葉や話題が投げかけられ、敬老者を中心とする聴衆（オーディエンス）が投げかけられた言葉にいかに関心したのかを分析し、「敬老会」の儀礼的空間が敬老者に複数の役割を担わせる場であることを明らかにする。当日の式次第等については、表1-1と表1-2に整理している。

まず、主賓挨拶において、仲村隆男（大正沖縄県人会会長）は、以下のような挨拶を行っている¹¹⁾。以下、すべての引用の（ ）内は筆者による補足、会場からの反応は〔 〕内に記す。

みなさん紹介ありましたように、今年6月、大正沖縄県人会の総会がありまして、前会長の川上忠男さんが、体調不良ということで、私に白羽の矢が立ちまして県人会

儀礼的空間における沖縄アイデンティティ継承のこころみ（猪岡叶英）

表 1-1 「大正沖縄県人会敬老会 2014」⁹⁾

日 時	平成 26 年 9 月 21 日（日） 午後 1 時 10 分頃開始、午後 4 時頃終了
会 場	大阪沖縄会館（大阪市大正区千島） 4 階ホール
会 費 （弁当代込み）	男性 2500 円 女性 2000 円 数え年の 80 歳（昭和 10 年生）以上の者は会費納入不要 弁当は「いちゃりば」（大正区三軒家東）より仕出し
式 次 第	二部構成（第一部は午後 2 時頃終了） （第一部）司会 座覇政一（大正沖縄県人会副会長・小林分会） 開会の挨拶（座覇政一）→幕開け合奏（野村流古典音楽保存協会）→主賓挨拶（大正沖縄県人会会長・仲村隆男）→財団法人大正沖縄協合理事長・上地由光）→来賓紹介→来賓祝辞（大正区区長・筋原章博）→議員代表挨拶（大阪府府議会議員・金城克典）→世界女子ミニフライ級チャンピオン（池原シーサー久美子）の挨拶→お祝い金の授与（写真 2-1）→敬老者代表（久高将松）によるお礼の言葉→乾杯（大正沖縄協会副理事長・平田勉による乾杯の音頭）→休憩・第二部準備 （第二部）司会 中村和文（大正沖縄県人会青年部） 第二部開幕の挨拶（中村和文）→余興…エイサー（写真 2-2）、琉球舞踊、民謡、琉球空手などの披露（表 2-2、「2014 年敬老会プログラム」参照）→閉会の挨拶（大正沖縄県人会青年部・仲村清孝） 第二部（「敬老会」）の終了後、反省会が同ホールで行われた。

表 1-2 「2014 年 敬老会プログラム」（☆は幼児・小学生の出演したもの）¹⁰⁾

出演順	出 演 団 体	曲 名
①	琉球会	エイサー ☆
②	松島美和琉舞研究所	ちんぬくじゅーしー ☆
③	川田綾子琉球舞踊教室	浜千鳥
④	婦人部（民舞グループ）	かなさんどー・夏ぬ涼浜
⑤	松島美和琉舞研究所	秋の踊り
⑥	（飛入り）大城清賢	（飛び入り）滑稽踊り
⑦	名嘉道場	空手 ☆
⑧	川田綾子琉球舞踊教室	瀧落シ・若松
⑨	松島美和琉舞研究所	花傘節
⑩	川田綾子琉球舞踊教室	谷茶前
⑪	婦人部（民舞グループ）	島ブルース
⑫	松島美和琉舞研究所	江佐節
⑬	川田綾子琉球舞踊教室	二人加那ヨー



写真 2-1 お祝い金の授与
（左：久高将松、右：大正沖縄県人会会長）



写真 2-2 エイサーを踊る子どもたち
（すべて筆者撮影）

会長ということにさせていただきました〔会場からの掛け声と拍手〕。ということで、これから何年続くかはわかりませんが、不肖私が務めさせていただきます。本日は敬老の方々、おめでとうございます。人数でいきますと、8年ぐらい前は、75歳以上が敬老として招待をしていたのですが、8年前ぐらいからは、80歳以上ということで。ちなみに（大正区役所）役所の方では、75歳が〔会場前方から70歳じゃないかとの指摘が飛ぶ〕。70歳からが敬老ですか。沖縄の方はみな元気なのでね。70歳以上で招待を送ったら、もうこの会場でちょっとうまらなくなると思いますので、収まらなくなると思います。ちなみに、確か、（紙をみる）80歳以上の方が北恩加島で8名、そして平尾で37名、小林が55名います。これが80歳以上で。大正区全体で79名、今回、招待状を出させていただきました。ちなみに、90歳以上ですね。北恩加島で4名、平尾が14名、小林13名、こういうことになってます。最近の新聞によりますと、世界一の長寿は女性の方ですね。世界一。男性の方は4位ということで、日本は、若い世代が年寄りを敬うような意識が高いと思っております。ちなみに100歳以上ですが、世界、いや、日本で8820いてます。今日来られている将松さん101歳で〔最前列に座る将松氏にむけて会場からの拍手が送られる〕。101歳ですね。おめでとうございます。この大正区に沖縄の方が、沖縄県人が移住してきたのが、大正時代と聞いております。逆算していただきますと、今年、来年で、100年ほどになります。その当時、この会館からイシカワあたりまで、川がたくさんあって、貯木場や製材所がたくさんありまして、そこにいた沖縄の方、もう少し前の方が、職業を求めて移り住んで、また親戚や知人が集まって、そっから大正区に増えたと聞いております。昭和10年5月大正沖縄県人会が発足されまして、戦前・戦中・戦後とさまざまな苦勞を乗り越えて、県人会の方が今まで親睦を深めて、諸先輩から沖縄芸能文化を継承し、今日も野村流とか沖縄踊りとか伝えていきたいと思います。敬老のみなさまに感謝しております。これからも、1世、2世、3世。3世、4世と沖縄の伝統芸能を続けていけますように、みなさん、多大な応援くださいますように、また、11月2日には、連合の運動会が、体育祭があります。その体育祭でですね、敬老の方の福袋競争がありますので、敬老の方は体を鍛えてですね。福袋競争にですね、ぜひ参加していただいて、また、来年5月には大正沖縄県人会の80周年記念事業がありますんで、また、みなさん元気なお姿をみせていただくようお願いいたします。最後になりましたが、ここにご参会のみなさまのご多幸と健康を願ひまして、私の挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました（会長がお辞儀をすると）〔会場から拍手〕。

大正沖縄県人会の会長である仲村隆男の挨拶は、新しく会長に就任した経緯の説明から

はじまる¹²⁾。新しく就任した会長と3分会の代表者である副会長の紹介が敬老会の主賓挨拶の前に行われており（表2-1 式次第）、引き続き挨拶において、会長が代わることとなった経緯の説明が期待され、冒頭の会場からの拍手と掛け声は、新しい会長を承認する意味合いがこめられたものであったといえるだろう。

会長の挨拶からは、長寿県としての沖縄の位置づけが大正区の沖縄出身者コミュニティ内においても援用されていること、大正区への沖縄出身者の移住と県人会の歩みが木材業や水辺と切り離せないこと、大阪（大正区）の地で沖縄出身者の歩んできた困難をとまなう道のりを代弁するあるいは象徴する存在と敬老者がみなされてきたこと、そして、1世や2世から3世や4世が継承すべきものは沖縄の伝統芸能としての踊りや唄であるとの意図が見いだせる。

女子世界ミニフライ級チャンピオンの池原久美子（リング名：池原シーサー久美子）の挨拶からも、より抽象化された形ではあるが、同様の視点が見出だせる。

こんにちは。池原シーサー久美子です。はじめての方ははじめまして。こんな素晴らしい会に呼んでいただき、昨日、チャンピオンになることができたので、この場に立つことができました。本当にありがとうございました。そしてみなさん、おめでとうございます〔会場から拍手、指笛が吹かれる〕。沖縄の人のパワーって、ほんとすごいなぁと本当に思いました。自分が10ラウンドなんですけど、世界戦、5ラウンド6ラウンドきつい場面があったんですけど、みなさんの応援で、最後の最後まで立つことができて、勝つことができました。みなさんこれからも応援よろしくお願いします（池原久美子がお辞儀をすると）〔会場から拍手〕。

池原久美子の挨拶においても、1世、2世の歩んできたと思像される苦難の歴史（「戦前・戦中・戦後とさまざまな苦勞を乗り越えて」仲村隆男）を沖縄出身者の力（パワー）へと昇華して語っているように感じられる。池原久美子の挨拶に「敬老会」に参加する敬老者の積み重ねてきた力への期待がみられる背景には、本土での生活の中で自らの曾祖父母や祖父母が経験してきた苦勞とそれを好機に変えてきた家族の歴史が根底にあるのではないだろうか¹³⁾。

池原久美子の曾祖父は、昭和の初めに沖縄県国頭郡大宜味村字田嘉里から大正区の北恩加島町へと出稼ぎに行き、先に来阪していた妻が営む関東煮などを出す居酒屋の傍らで、和歌山の木材や南洋材を取り扱う材木業に従事していた。

戦後、沖縄出身者の集住地域であった北恩加島一帯は、大阪市による土地区画整理事業の対象地域となる〔財団法人大阪市都市整備協会 1995〕。北恩加島一帯には、鉄工所や製

材所等が立ち並んでいたが、昭和30年代に木材業の住之江区平林への事業移転が進められると、事業移転にともない、木材業に従事する沖縄出身者の多くが住之江区に移り住むことになる。

曾祖父の跡を引き継いでいた久美子の祖父は、住之江区に拠点を移し、木材屋から製材業に業種替えをして続いていたが、木材関係業界の低迷から廃業し、ふたたび大正区に戻り、同区小林町で料理店「正起屋」をオープンさせている。曾祖母が居酒屋をしていたことから着想を得て、再起する意味を込め「起」とつけ、また祖父自らの名前から「正」の一字をとって、店の名前を決めたという¹⁴⁾。

敬老者の積み重ねてきた力への賞賛と期待は、大正沖縄県人会会長が最高齢者として久高将松の名前を挙げた際に、会場から久高将松に向けられた拍手にも端的にあらわれている。

大正沖縄県人会会長や池原久美子らの祝いの言葉に対して、敬老者の代表として、久高将松が返礼をおこなっている。

只今、ご祝儀をちょうだいして、えらいありがとうございます。わしはいつも70代の気分ですいつもおりますけど〔会場からの拍手と笑い声〕、4～5年前までは敬老若水会で、17名ほどおりまして、毎年敬老の日には他で宴会を開いてやっておりますけれども、もうわし1人だけ残っております。他の年寄りはいなくなってしまうて。只今はご祝儀もちょうだいしまして、ありがとうございます。おいでの方々のますますのご健勝とご繁栄をお祈りいたしまして、甚だ簡単ではございますが、お礼の言葉といたします。ありがとうございます（久高将松がお辞儀をすると）〔会場からの拍手〕。

久高将松の「わしはいつも70代の気分ですいつもおりますけど」との発言に対して、会場から巻き起こった拍手と笑い声は、前向きな年の取り方に対する賞賛であるとともに、久高将松が「年を重ねても若々しく健康長寿であること」との周囲が抱く理想像に応えたことを意味しているといえるだろう。

また、敬老者は、第二部の余興において、エイサーや琉球舞踊、琉球空手を披露した子どもの県人会組織への加入を承認し、繋ぎ止める存在としても位置づけられている。

第二部の司会者である中村和文は、エイサーを踊り終わった子どもたちに学年を尋ねたのちに、以下のような発言をしている。

（舞台に立つ子どもたちを見ながら）小学生たちがこれからの県人会を（支えてい

く)。また、頑張ってもらうように、お父さん、お母さんも一緒に、頑張っていたきたいと思います。また、おじいちゃん、おばあちゃんの声援があれば、ずっと踊ってくれると思いますので、途中、中抜けしたり、休んだりするかもしれませんが、県人会にもどってきてもらうように、みなさん、手をたたいて、ほめてやってください。それではありがとうございました（舞台に立つ子どもたちがお辞儀をすると）
〔会場から拍手〕。また、各舞踊教室の子どもたちが出てきますので、みなさん楽しみにしてください。

中村和文の言葉からは、一世や二世にあたる敬老者の声援と拍手が、孫やひ孫世代の県人会における芸能活動の励みとなり、活動を褒め称える（承認する）ことが、彼や彼女らが県人会に留まる、あるいは戻ってくる原動力となるとの認識がうかがえる。

この点は、中村自身の経験を反映した言葉であるといえるだろう。中村は、敗戦直後、満州からの引揚げによる呼び寄せによって、大正区に移住した父と同じく、敗戦直後に親戚に連れられて、大正区に移住した母を持つ。父母ともに県人会の活動をしており、県人会の集まりについていくことが子どものころからあったという。加えて、母親が琉球舞踊の師範をしており、琉球舞踊を習うことが当然とされていたという。

中村は大正沖縄県人会の青年部に所属し、エイサーの指導等も行っている。中村自身はエイサーを始めたきっかけを「23（歳）の年にエイサーを習い始めて、知り合いの、親しい（沖縄出身の）おばあちゃんとこに踊りに」¹⁵⁾行くためであったと振り返る。一生懸命に練習したエイサーを沖縄出身の第一・二世世代と思われる「（沖縄出身の）親しいおばあちゃん」に披露し、喜ばれた経験がその後の活動を支えていると考えられる。

以上、指摘してきた点をまとめるならば、大正沖縄県人会の「敬老会」は、①大正沖縄県人会などの各役員のお披露目の場として位置づけられ、②沖縄出身者の子どもの県人会という組織への承認（成員権の獲得）の機会であると考ええる。①については、役員の交代が行なわれた、平成26年の敬老会でのみ見られた一過性の光景であるといえるかもしれない。しかし、毎年、敬老会の冒頭では、主賓挨拶として県人会の会長によるスピーチが行われているといい、県人会のその他の行事には参加しないという高齢の会員もいる¹⁶⁾ことから敬老会における会長やその他会員らのスピーチは、1世や2世にとってどのような人物が役についているかを知り、最近の県人会の動向などを把握する絶好の機会となっていると考える。

大正沖縄県人会の「敬老会」におけるスピーチやそれに対する反応からは、移住の第一・二世世代にあたる敬老者が「敬老会」の場において、祝われる対象というだけでなく、その身に帯びている（あるいは帯びていると想定される）年長者としての権限（力）を沖縄出

身者の共同体の中で発揮することが求められているといえる。沖縄出身者の共同体のルーツ（根源）となる存在として、その子や孫を導く対象として敬老者は見られ、また敬老者自身もそのようにふるまうことを内在化していたといえる。

おわりに

本稿は、平成26年の大正沖縄県人会主催の「敬老会」における、筆者による参与観察や聞き取り調査を中心に考察を試みたものである。

まず、大正沖縄県人会における、合同の長寿祝いである「敬老会」の位置づけを確認し、次に平成26年9月21日に行われた大正沖縄県人会の「敬老会」において、敬老者に対して何が語られ、求められたかを主に主催者や来賓のスピーチ、敬老者の反応の分析を通じて敬老会の儀礼的空間を考察した。

以上の考察からは、敬老者は敬老会において沖縄出身者の共同体を価値づけ、意味づける存在であるとの姿がみえてきた。

「敬老会」の場は、大正沖縄県人会などの各役員のお披露目の場として位置づけられ、県人会に属し、将来的に県人会を担っていくと想定される子どもが沖縄文化の象徴としてエイサー、琉球舞踊、琉球空手などを披露する機会と位置づけられている。

この点を鑑みるならば、「敬老会」は祝われる側だけのものでなく、祝う側と祝われる側の双方が「敬老会」という儀礼的空間において、それぞれの家族や自身の経験を一つの軸としながら、1世、2世の歩んできたと思像される苦難の歴史を想起し、沖縄文化を守る営みとして沖縄の唄や踊りの伝承が行われる場であったといえる。同時にそれは、祝う側と祝われる側の双方が「沖縄」を起点として、いくつもの意味や価値を見出しながら祝いを継続させていくことができるということである。

本稿では、敬老者と彼・彼女らを取り巻く人びとが敬老会の場に見出した祝いの意義付けの一側面をとらえたのみである。とはいえ、沖縄出身者の高齢化にともなって、「敬老会」という儀礼を媒介にし、次の世代が沖縄の文化やアイデンティティをいかに継承しているのか、その一端を示すことができたと考える。

注

- 1) 主な先駆的研究として、宮田登 [1986]、松崎憲三編 [2002]、同氏 [2006] がある。宮田は、「移民と民俗文化」の中で、海外の日系社会における日本の行事や習慣の実態把握の必要性を説き、また、松崎は「県人会と同郷団体」の中で、沖縄の同郷団体は冠婚葬祭などに関わる費用を相互に扶助する模範から端を発しており、「出身地とのつながりにおいては伝統行事に参加し、故郷のそれを維持する上で重要な役割を果たしている」[松崎 2006: 144] と指摘して

いる。

- 2) 国内の県人会などの同郷集団における沖縄を離れた芸能や信仰の伝播を考察したものとして、井口淳子〔2001〕、平井芽阿里〔2010〕などがある。また、海外の沖縄系コミュニティにおける祖先崇拝の実践を考察したものとして、森幸一〔2005〕などがある。
- 3) 奄美諸島、沖縄本島・周辺離島、宮古・八重山諸島などにみられる人生儀礼として生年祝いがある。生年祝いでは、数えの13、25、37、49、61、73、85、97歳を厄年ととらえる。61歳以降の生年祝いに祝宴を行うものとされ、特に85歳を過ぎて以降を「長寿祝い」とみなすことが多い〔古家 2009〕。祝いの形態として個人単位で親戚や知人をホテルや宴会場に招待して祝う、または、一月の年日（トシビ）に合わせて、自治会などが祝いを迎えた対象者に対して合同で行うケースがある。大阪市大正区とその周辺の沖縄出身者の集住地域では、沖縄料理店で家族や親戚を招いて生年祝いを行うことがある〔猪岡 2014〕が、本稿では、県人会による合同の生年祝いである「敬老会」に着目する。家族、親戚を招いて行う沖縄料理店における生年祝いと県人会による合同の生年祝い（「敬老会」）では、祝いの形態や意味づけが異なっていると考えるが、この点については別稿で論じたい。
- 4) 大正沖縄県人会の「敬老会」においては、長寿者は「敬老者」「招待者」「おじいちゃん、おばあちゃん」「一世・二世の人たち」などと呼ばれていたが、本稿では、「敬老者」に統一した。
- 5) 平成26年の大正沖縄県人会の「敬老会」に敬老者として招待されていた男性（70代・沖縄県八重瀬町出身）の言葉。
- 6) また、府内には沖縄の出身市町村あるいは字単位の郷友会や同郷組織が存在している。これらは県会の下部組織や大阪府内に限定されたものでなく、関西一円に広がり、血縁や地縁に基づくものとされる〔宮脇 1997〕。
- 7) 仲村隆男に対して平成26（2014）年9月21日に大阪沖縄会館（大正区千島）の4階のエレベーターホール、大城富雄に対して平成26年8月28日に同会館事務局にて聞き取りを行った。
- 8) 88歳の米寿の祝いにあたる祝いは、沖縄においてトーカチと呼ばれる。祝いの品としてお米を量る竹の杓（とかき）を配るところからであるとされ、生年祝いの干支の周期から外れているものの、現在の沖縄において生年祝いと区別されることは少ない。97歳の生年祝いは、カジマヤー祝いと呼ばれ、カジマヤーは沖縄の方言で風車や人が集まる辻や角を意味し、居住している地域や出身村や字などで、当事者をトラックあるいはオープンカーに乗せて風車を配りながら、パレードを行うことがある。
- 9) 大正区沖縄県人会・財団法人大正沖縄協会「平成26年度敬老会の御案内」および筆者による当日のフィールドノートを参考とした。
- 10) 大正区沖縄県人会が用意した当日の第二部の演目一覧および筆者による当日のフィールドノートを参考とした。
- 11) 当日のビデオ撮影および録音に基づき、再構したものであり、発言を一字一句聞き取ることができていない点を付言したい。
- 12) 各分会の代表者（大正沖縄県人会副会長）らの手によって会員各位に事前に配布されていた「平成26年度敬老会のご案内」では「この度は、大正沖縄県人会 新会長 仲村隆男 大正沖縄協会 新理事長 上地由光に変わって、初めての全体の催しになります。皆様方には、ご多忙な事とは存じますが、万障お繰り合わせの上、ご出席くださりますようにご案内申し上げます。

儀礼的空間における沖縄アイデンティティ継承のこころみ（猪岡叶英）

げます」（大正沖縄県人会「平成26年度敬老会のご案内」）とある。

- 13) 確かに、池原久美子の発言が投げかけられる先には、敬老者に限定されない人びとも含まれていると予想されるが、そのもっとも主要な受け手と考えられるのは敬老者であると考ええる。
また、彼女の挨拶からは、自らが大正区の（在阪の）沖縄のたちに支えられ続けてきたという沖縄出身者同士の連帯の一つの形が垣間見える。
- 14) 池原久美子の大伯父である安里行彦に対して2014年2月9日、3月9日にJR大阪環状線野田駅周辺にて行なった聞き取りによる。
- 15) 平成26（2014）年9月21日に大阪沖縄会館の4階ホール（「敬老会」会場）にて実施した聞き取りによる。
- 16) 実際、敬老会当日の会場における聞き取りでは「この会（敬老会）だけには毎年きとる」（70代 男性）「他の（県人会）集まりにはよう出られませんけど、招待状いただいたので、この会（敬老会）には来ました」（80代 女性）などの声が聞かれた。

参考文献

- 猪岡叶英 2014「大阪市大正区のウチナーンチュにおける長寿祝い——その儀礼形態と意味づけに関する一考察——」『京都民俗』32号、京都民俗学会。
- 井口淳子 2001「ウチナーンチュ（沖縄人）になるためのエイサー——尼崎・琉球會にみる芸能とアイデンティティの関わり——」『年報音楽研究』第18巻、大阪音楽大学音楽研究所・楽器博物館。
- 大阪沖縄県人会連合会編 1987『雄飛——大阪の沖縄 大阪沖縄県人会連合会40周年記念誌』大阪沖縄県人会連合会。
- 1997『雄飛——大阪の沖縄 大阪沖縄県人会連合会五十周年記念誌』大阪沖縄県人会連合会。
- 財団法人大阪市都市整備協会 1995『大正地区復興土地区画整理事業誌』大阪市建設局西部土地区画整理事務所。
- 平井芽阿里 2010「愛知のなかに見る沖縄社会——神々との海を越えた繋がり」『アリーナ』9号、中央大学総合学術研究院。
- 古家信平 2009「年祝いにみる擬死再生」『日本の民俗12 南島の暮らし』吉川弘文館。
- 松崎憲三編 2002『同郷者集団の民俗学的研究』岩田書院。
- 松崎憲三 2006「県人会と同郷団体」新谷尚紀・岩本通弥編『都市の暮らしの民俗学① 都市とふるさと』吉川弘文館。
- 宮田登 1986「移民と民俗文化」『現代民俗論の課題』未来社。
- 宮脇幸生 1997「関西における沖縄出身者同郷組織の成立と展開」『人間科学論集』28号、大阪府立大学人間科学研究会。
- 森幸一 2005「ブラジル沖縄系人の祖先崇拜の実践——彼らとブラジル・沖縄・日本との関係の変化に注目して」『アジア遊学』76号、勉誠出版。

儀礼的空間における沖縄アイデンティティ継承のこころみ（猪岡叶英）

【謝辞】

本研究の調査に際して、多くの方々からご協力とご支援をいただきました。

在阪沖縄県人会のみなさま、並びにご協力いただいたすべての方々に、心より御礼を申し上げます。

（いのおか かなえ 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）